中部学院大学・中部学院大学短期大学部　教育実践研究第３巻第１号(2017) 95－102

小学校段階における英語インプットの指導方法を活かした中学校初期段階の英語指導の実践例紹介

新　井　謙　司[1)]

Introduction of Some Detailed Ideas of English Input Method for the Beginning Stage of English in Junior High School

Kenji ARAI

小学校の新学習指導要領は2020年に全面実施となり、中学校においては、その１年後の2021年に全面実施が決定している。それぞれの１年前には、市町村教育委員会により地区ごとに教科書採択がなされる。そういった動きの中で小学校においては、新学習指導要領を見据えて、2018年度より先行実施のスタート準備をすすめ、教科化に向けて大きな歩みを踏み出しているところである。一方中学校においては、新学習指導要領が2021年に全面実施されることは周知されているが、これまでと変わらない「教科」という枠組み内での変更であるためか、あまり話題になりにくい側面があるように感じている。新学習指導要領にある追加・変更された内容は、はっきりと小学校英語の学びを土台としたより発展的で、より質のある内容になっており、教科書もそういった内容を踏まえての改訂になることが期待されている。これまでの中学校における英語指導方法の見直しや小学校英語の学びが活きる視点のある指導方法を柔軟に取り入れる必要があると考える。特に小学校と中学校のつなぎとなる初期段階における中学校の英語指導方法は、子どもたちの小学校での英語の学びを十分に活かしながら、スムーズな接続を促し、後の英語学習の助走期間となるような指導計画をもたなければいけないと考える。

そこで本稿では、小学校英語におけるインプットを大切にした指導方法を基に、中学校初期段階の教科書題材の扱い方について具体的な実践例を含めながら子どもの英語の学びをスムーズに移行する方策について検討したい。

キーワード：小学校英語、中学校初期段階の英語指導方法、英語のインプット、小中英語の接続

１．小学校の新学習指導要領の全面実施によって変わること・変わりにくいこと

小学校において、どの段階から英語に慣れ親しんできたのか、授業時間数、指導者、指導方法、学習教材等によって子どもたちの英語の学びの質や量は大きく異なる。英語特区の市町では、小学校１年生から教科として英語を週１時間学ぶ環境があり、高学年では週２時間の英語学習をしている場合もある。指導者は担任が主となり、ALT や専科教員が補助をする体制も整っていることが多い。また ICT 教材も積極的に導入され、学習カリキュラムも確実に整備されている。一方、環境が整っていない他の公立小学校においては、ALT が訪問する日に合わせて、低学年は年間数時間、中学年は年間10時間程度、高学年は週１時間の年間35時間の授業時間数である。特区の小学校における６年間の英語学習総時間は、約280時間程度であり、その他の公立小学校においては、約90時間から100時間程度であると考えられる。そういった学習環境一つをとって

1）教育学部子ども教育学科

も様々であり、学習教材、指導方法にいたっては多種多様であり、中学校初期段階における子どもたちが、小学校においてどのような学びをし、どのような英語の力を身につけてきているのかを一律に表すことはできない。

そのような学習環境の差違は、2020年からの新学習指導要領の全面実施を皮切りに統一されることになり、全国のどの小学校でも時間数や年間カリキュラムといった面については、格差が和らぐと期待している。

しかし課題は依然として山積しており、特に指導者の英語の質や指導方法については、大きな課題として先が不透明のままである。新学習指導要領が全面実施となっても、この指導者に関わる課題はこれまで以上により多様性を生んでいく可能性すらあると考えている。その多様性は決して悪いものではないが、子どもたちの言葉を学ぶプロセスを無視した指導方法が用いられたり、中学校の教科書を使って学習するような指導方法が取り入れられたりする可能性も否定できない。つまり、教科書をどのように料理するかは、指導者の指導感、英語力、そして、子どもの言葉を学ぶプロセスの見たて方によって、大きく変わると考えるからである。

このように小学校英語の指導者や指導方法の課題がある中で、実は中学校の英語教師の意識改革も必要となってきている。渡邉・髙梨・齋藤・酒井(2013)では、中学校英語教育の改善について触れながら、中学校英語教員の意識調査の結果報告のまとめとして、充実した小中連携のために、小中の相互理解を深め、児童・生徒の英語学習のためにプラスになる指導体制のあり方を検討する必要があると述べている。さらに、福本（2010）の調査によれば、「中学校での英語の授業の導入や授業のやり方を小学校に合わせて変えている」という質問に答えた中学校教員の割合は13.5％であった、と報告されている。このことからも、すでに目の前まできている新学習指導要領の全面実施に伴い、小学校英語での子どもたちの学びの中身や質に対して高くアンテナを張る必要があり、さらに言えば、小学校英語の指導方法やその考え方を取り入れるよう歩み寄ることが中学校側の英語担当により求められていくと考える。

２．中学校初期段階の指導方法の改善に向けて

2-1　中学校英語の新学習指導要領にある小学校英語との関わりについて

中学校の新学習指導要領第１章の総則には、「学校段階間の接続においても、小学校教育までの学習の成果が中学校教育に円滑に接続され，義務教育段階の終わりまでに育成することを目指す資質・能力を，生徒が確実に身に付けることができるよう工夫すること」と言及されている。さらに、第２章第９節外国語の「３ 指導計画の作成と内容の取り扱いウ」には「小学校第３学年から第６学年までに扱った簡単な語句や基本的な費用減などの学習内容を繰り返し指導し定着を図ること」と明記されている。

このことからも、中学校の新学習指導要領は、どの教科においても小学校での子どもたちの学びを中学にスムーズにつなげながら、より発展的な、より豊かで質のある深い学びを展開していくことを期待している。もちろん外国語（英語）においても同様であり、小学校英語での豊かで真実味のある表現活動を通して身につけてきた「学習ストラテジー」や「英語を学ぶ意欲」を土台にして、繰り返しの言語活動を通して、定着を図ろうとするものである。

2-2　中学校英語学習を支える「学習ストラテジー」

久埜・新井（2017）において、小学生の子どもたちにとって、必然性のある、かつ、自然な思考の流れがうまれる場面において英語を聞いたり、話したりする英語学習のプロセスをたくさん経験してきた子どもたちは、その後の中学校での英語学習を支える次のような「学習ストラテジー」が身につくとまとめた。ここで再度確認したい。

①様々な英文をききながら、大切な言葉を聞き逃さず、少ない情報を手立てに、意味を理解しようとするようになる。
②多少わからないといった場面でも、あきらめないで聞いたり、読んだりするようになる。
③英語らしい発音やリズムを抵抗なく受け入れ、自分でも意識して練習するようになる。
④より自然なリズムでより自然な身のこなしで、英語を使ってやり取りを楽しむようになる。

⑤早口ことばなど様々な基本的な英文に音声から丁寧に親しんできたことにより、例えば一般動詞と Be 動詞の違い、三人称単数、複数形、前置詞の位置、形容詞と名詞の語順等など、基本的な文構造の理解が進みやすい。

⑥正しいリズムで音声のインプットを受けていることによる語と語のリエゾンが初見の文にも転用されやすい

⑦単語を覚えていく際に、声に出して読みながら、音と文字のすり合わせをしながら書いて覚えようとする。

このような「学習ストラテジー」が身につきやすいと考えられる指導方法は、パターン化された授業展開や語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれる指導方法では十分に活かされないことが多いと考えている。新学習指導要領の中には「児童生徒の学びの過程全体を通じて，知識・技能が，実際のコミュニケーションにおいて活用され，思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得され，学習内容の理解が深まる」と明記されている。ここで示されている「実際のコミュニケーション」という言葉をどのようにとらえるのか、ということが指導者の指導感に関わる部分であると思われるが、ここでは「学習ストラテジー」が身につきやすいと考えられる指導方法には「真実味のある意思の伝え合い（久埜・粕谷・岩橋，2008）」のある言語活動であり、学習指導要領が示す「実際のコミュニケーション」に通じる部分であると捉えることとする。

2-3　中学校英語の教科用図書（本稿では「教科書」に統一）

現行の教科書は、2015 年に採択され、現在で 2 年目となる。岐阜県の公立中学校における英語の教科書は次の表の通りである。

実は岐阜県内の私立中学校の大半は、1 年生より NEW CROWW を採用し、現在はほぼどの学年も NEW CROWN を活用している。その理由として考えられことは、英語の文書量が NEW HORIZON より多く、読み応えのある内容が採用されていること、そして、文法に関わる確認問題等が充実していることが挙げられる。

公立中学校（外国語）		
地区名	1 年生	2 年生・3 年生
岐阜地区	NEW CROWN	NEW CROWN
岐阜市内	NEW CROWN	NEW CROWN
西濃地区	NEW HORIZON	NEW HORIZON
美濃地区	NEW CROWN	NEW HORIZON
可茂地区	NEW HORIZON	NEW HORIZON
東濃地区	NEW CROWN	NEW CROWN
飛騨地区	NEW HORIZON	NEW HORIZON

NEW CROWN：三省堂
NEW HORIZON：東京書籍

このように岐阜県では、三省堂と東京書籍の教科書の 2 種類のみが採択されている。また、美濃地区以外は、すべて以前と同じ教科書会社を採択している。その理由としては、教師の負担軽減と慣れ親しんできたシラバスから脱却することへの不安感があるのではないかと思われる。さらにこれまで活用してきた教科書を他社に変更するということには大義がなければ踏み込めないことであり、子どもたちの英語学習に支障を来すような内容等が掲載されていないのであれば、以前のままと考えてよいと考えられている傾向があるのではないか、と推測する。

そこで本稿では、小学校英語の副読本である「Hi, friends!」の出版社である東京書籍から出版されている「NEW HORIZON」のゼロ単元の一部を例に取り上げ、具体的な実践例を交えながら小学校英語と中学校の初期段階の接続について考えてみたい。

2-4　中学校初期段階の指導方法の実践例①

小学校英語においては、正しい英語のリズムをもって、心のこもった言葉で子どもたちに語りかけることや、やり取りすることは豊かな英語のインプットを与えるという意味でも大変重要である。さらに、子どもたちが英語を聞いたり思わず言いたくなったりする、といった心の動きを促し、子どもの本気度を高めていく教師と子どものやり取りが授業の随所に設定されていることは、子どもの言葉の学びを促進させたり、気づきを促したり、理解を深めたりするためには、大変重要であると考えている。こういった視点を中学校教科書の教材を扱う時にも取り入れながら、中学校初期段階に登場する題材を活かした指導方法について考えてみる。

まず、１年生のNEW HORIZONを開くと、「一日のあいさつ」(p.4) という項目が設定されている。あいさつの英語が流れるCDを聞いて、どの絵のことを言っているのか正しい番号を選び、その後、Good morning, Takashi. How are you? という流れでCDと一緒に声に出してみる、という学習の流れである。もちろんこのように進める英語教師は少ないだろうと思われるが、教科書にこのような学習の流れが設定されており、かつ、普段の英語でのあいさつの様子を知らない英語教師であったならば、あいさつを単なる練習だけで身につけさせようとする指導に陥る可能性もゼロではないだろう。このような指導方法によって、真実味のあるやり取りが生まれるとは考え難い。

例えば、普段の生活の中で「英語の日」を英語教師が設定し、ALTと協力しながら、朝のあいさつ活動等から、Good morning, ○○さん. How are you? と聞いたり、廊下ですれ違う中学生に、How are you? Where are you going? What is the next class? などと聞いたほうが真実味が生まれる。その際に、Are you sleepy? What time did you go to bed last night? Did you stay up late for studying? というように心を込めて声をかけることも可能ではないだろうか。岐阜県高山市立本郷小学校では、水曜日を英語の日と位置づけ、その日の朝は、スクールバスから降りてくる子どもたちを学校職員が英語のあいさつで出迎えるようにしている。もちろん校長先生もその一人である。そのバスには、同地区の中学生も同乗しているため、小学校職員は、小学生だけでなく中学生にも英語であいさつを交わす。Have a nice day. Study hard. Now it is 7:50. Hurry up! と時間を伝えたりすれば、必然的に子どもたちは数字を意識した英語のインプットを受けることにもなる。

つまり、教科書題材を教科書の世界だけで終わらせるのではなく、普段の子どもたちの身近な生活の中に投げ込んで、子どもたちが理解可能な英語を聞かせながら、語りかけたり、やり取りをしたりする場面を学校全体で、中学校や地域も巻き込みながら作り出す思考回路（カリキュラム・マネジメント）が必要ではないか。2-2で示した「学習ストラテジー」の④の育成にも関わるところであろう。

2-5　中学校初期段階の指導方法の実践例②

NEW HORIZONの「教室で使う英語」(p.5) では、Stand up. Look at this picture. といったClassroom Englishが絵と共にまとめられている。これもあいさつのところと同じであるが、ただこれを見ながら読ませたり、先生がジェスチャーをし、それに当てはまる英語表現を言わせてみたりする指導をやってしまいがちである。このページは、わざわざ時間を割いて学習すべきところではなく、普段の毎回の授業の中で、教師が実際の場面でこれらのClassroom Englishを意識しながら繰り返し語りかけるように活用していけばよいと考える。そうやって長い時間をかけて音と場面によって意味をとらえていった子どもたちに、１年生の後半にでもこの５ページに戻り、どの音がどの絵とマッチするか考えさせたり、読ませたりしながら、理解の定着を見届けることもできる。さらには、子どもたち自身が普段繰り返し耳にしている表現が読めてしまった、わかった、という気持ちにさせたり、自分が理解できていることを認知させることができると考える。

子どもたちに表現を使えるように導こうとするためには、多量のことば、英語を聞かせることが優先されなければいけない。そしてその時、使われる場面がしっかりイメージできるように示されており、真実味のある語りかけである必要がある（久埜, 2010)。

2-6　中学校初期段階の指導方法の実践例③

NEW HORIZONの「英語でいろいろなことを言おう」(pp.8-9) では、1～100までの数字や曜日、序数の数え方、そして、月の言い方がまとめてある。小学校段階で、ある程度の大きな数字の音は知っていたり、数字のルールも自分からすでに見つけていたりする場合が多い。また、自分の誕生月は聞いてわかる、言える、という子どもも少なくないだろう。

久埜(2010)は、高学年の特徴の一つとして「自分が表現するとき、内容が真実味を欠いて空々しいと察知すると気持ちよく発話することができない」と言っている。このことからも、中学１年生が本気になって数字を考えたり、数えたり、言ってみようとしたりする場面がなければ、英語で数字を言う練習をするだけになってしまい、次第に声のトーンも下がり、正しい発音やアクセントを意識した発話には

図1　NEW HORIZON 1年生 p.8

つながっていかない。

まずは数字の音になれるために、一人ひとりに数字カードを配布する。裏には数字が英語で書かれている。数字を表にして自分の机の上にランダムに置き、教師からの指示で正しいカードを探す、一人カルタをしてみる。落ち着いた、安心できる雰囲気の中で、丁寧に音を聞かせたい。カルタとなると数名でカードを取り合うような場面になりがちであるが、一人カルタであれば、となりの仲間の様子をうかがいながらカードを探したり、ある程度は自分のペースで考えながら探したりすることが可能である。そして、教師も子どもも数字の扱いに慣れてきたところで、How many students are there in 1A class? とか、How many teachers does this school have? How old is Kocho-sensei? How many baseball players are there in this class? 等と数字を連想させる英文を聞かせ、自分から数字を数えたり、考えたりしながらカードを選ばせたい。2-2で示した「学習ストラテジー」の育成の観点からみると、①・②・⑦の育成につながると考えている。

このように数字の音に慣れ親しんだ後は、先生が言う数字を裏返して、文字を読ませたり、それらの数字を教師がわざと間違って発音し、子どもに修正させたりしながら、徐々に文字への認識を高めていくこともできるであろう。

さらに大きな数字を扱う場合には、例えば、あるファースト・フード店のメニュー表を持ってきて、ちょうど1000円になるように買い物をする。ここはあくまでも教師と子どもとの真実味のあるやり取りを通して、大きな数字を扱うことが大前提である。予想されるやり取りとしては、

T : What do you want to have?
S1: Cheese burger!!
T : OK. You want to have a cheese burger.
　Anything else?
S2: I like vanilla shake.
T : OK. But you have only 1000 yen.
　Cheese burger is 380 yen.
　Vanilla shake is 200 yen.
　How much is left now?

といったようなやり取りを教師と学級で進めていく。さらには、ICT 教材やインターネットを活用し、例えば、時差を取り扱いながら(久埜, 2010)、様々な国の時刻を推測させて、映像と時刻を瞬時に提示することも可能であろう。通貨のレートにも触れて、今日の1ドルは、日本円でいくらかになるのか、ブラジルの通貨は何だろうか、日本円でいくらになるのか、自分が住んでいる町と姉妹提携をしているような海外の町があったならば、それを題材にした活動ややり取りも可能である。このように、様々な真実味のある場面設定の中で、数字を聞いたり、読んだり、推測したりさせながら、様々な数字を学ぶことが必要であろう。

2-7　中学校初期段階の指導方法の実践例④

NEW HORIZON の p.10 は、「好きな食べ物・飲み物」、「できること」をテーマにしたページとなっている。I like ○○. Do you like ○○? Yes, I do. I can play soccer. Can you play baseball? No, I can't. といった表現は、小学校英語では大変よく扱われている。

NEW HORIZON では、like は Unit 3 の一般動詞の導入段階で扱われている。また can は Unit10 の助動詞の導入単元の中で扱われている。しかし小学校段階において、すでに子どもたちはこれらの音に慣れ親しんできていることを考えると、中学校初期段階において、すでに Unit 10 程度までのことは音を聞けば、ぼんやりとでも理解できると子どもたちは思っている可能性がある。

しかし中学校英語教師にそういった視点がないま

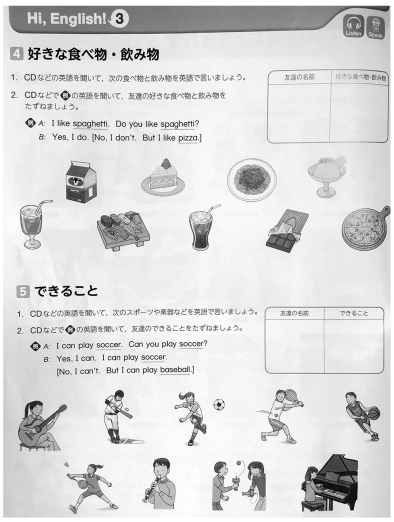

図２　NEW HORIZON １年生 p.10

図３　NEW HORIZON １年生 p.12

まにこのページを見たとすれば、後に Unit３や Uni 10で扱うのだから、中学校の初期段階で扱わなくてもよいページとなってしまうのではないだろうか。

このページから中学校英語教師が考えなければいけないことは、中学校入学の時点で子どもたちはすでに様々な一般動詞を聞いたり、話したりしながら、慣れ親しんできていること、そして、ある程度の正確性をもって、自分のことを数行で言えるようになってきているという事実である。その小学校英語での学びを､日々の授業の中で活用すべきである。このページを突如として取り扱うのではなく、例えば教科書を使った「ページ探しゲーム」をしながら、Can you see a boy playing soccer? How many girls can you see? Do you see sushi? Do you like it? What sushi-neta do you like the best? 等と、どんどん英語で質問を投げかけながら、小学校英語で親しんできた英語表現を想起させ、何度も繰り返し親しませていくやり取りができる中学校英語教師でありたいと思う。そして、単語や英文の持つ意味を子どもたちがどのように受け止めているのかを考えながら、心を込めて表情豊かなイントネーションのある英語でやり取りをしたい（久埜，2017)。

2-8　中学校初期段階の指導方法の実践例⑤

p.12からは、文字を扱う Unit０が始まる。

以前にこのページをどのように扱うのかある中学校の英語教師数名に質問したことがある。多くの答えは、ＡからＺまでのアルファベットを大文字から確認するために読んでいく。一緒に読ませる。小文字とマッチングさせながら読ませる。先生が言うアルファベットを指差しする。Phonics のチャンツ CD で練習する。といったことが大半であった。中には、絵にある単語の発音を確認した後は、宿題で単語を覚えてくるよう指示し、後日単語テストをする、という少し飛躍した答えもあった。今後の小学校英語の教科化により小学校段階での文字の扱いがより明確になるであろうと期待している。それにより、中学校側の初期段階の文字の扱い方についての中学校英語教師の意識を変えていく必要がでてくることは容易に想像するところである。

一人ひとりに ABC カード(ぼ～ぐなん)を準備し、それを活用しながら、文字の音に着目させることも可能である。ここからの実践例は、久埜百合先生（中部学院大学学事顧問）が幾つかの模擬授業の中で取り扱っていたことを基にした実践例を紹介する。大文字でも小文字でも同じ要領で実践できる。

・Ａ～Ｚまでランダムに机の上に並べる。
・Ａ～Ｚまで順番に並べさせる。
・崩して、再度Ａ～Ｚまで並べさせる。ここで子どもたちの並べ替えのスピードが明らかに向上していることを子どもも実感している。
・先生が言うアルファベットを取っていく。
　Can you find “Ｐ”？　Please take it.
・最後に、例えば、H、K、N が残るようにカードを取っていく。最後にその文字を並び変えると何になる？　と考えさせる。すぐに NHK と並び変えながら答えてくれる。
・その他にも、アルファベット読みをしない語が

残るようにしてみる（渡邉・髙梨・齋藤・酒井，2013）。例えばVIDEOやUNICEFといったものも比較的スムーズに並び変えたり、読めたりできる。それは普段から見慣れている文字列であるからだと考えられる。

・_anana と先生が発音し、何か音が足りないことを認識させ、足りない音を入れて言い直してみて、と促す。_anana → Banana と子どもは言い直す。足りなかった音は、どの文字かな？と質問してBのカードを取らせる。その後は、すべて英語で進めても子どもは理解をしてついてくる。

・最後に残ったカードが、例えばJであったら、Jからは始まる英語を探してみよう。と投げかけると、すかさずJapan, Jam, Jungle gym等どんどん子どもたちが言いたい気持ちを全面に出しながら、単語一つではあるが発していく。

・教科書の絵を一度確認した後は、「つられちゃダメよゲーム」として、home → _ome と言って子どもが自分で修正していく活動をする。子どもたちは楽しみながら、文字と音のすりあわせを行っていく。これに慣れてきたところで、先生役をやってみたい人、と聞くと喜んでやってくれる子どもが必ずいるので、その子と学級の仲間がやり取りを始める。時々、正しい英語も言いながら、子どもたちでゲーム的な楽しさを盛り上げていってくれる。

・母音が抜けている単語プリントを配布し、抜けているところに、知っている音を頼りにアルファベットの文字を書き入れてみる。

・次に特定の同じ子音が抜けている単語プリントを配布し、子音のルールを気付かせていきたい。

小学校段階から、子どもたちはすでに多くの文字を見たり、CDやVIDEO、GAME OVERといったことは読めて、声に出してきている。その段階では英語を読んでいる、という認識はないのかもしれない。そこを上記のような手法で意識化し、単語の音と文字とのすり合わせができた経験を積ませたい。そういった経験を沢山積んできている子どもは、学習ストラテジーの②・⑦といった力を身につけて、後の英語学習に向かうことができるものと考えている。

2-9　中学校初期段階の指導方法の実践例⑥

NEW HORIZONのp.16は、慣れ親しんだ単語をなぞり書きするところである。別プリントに、単語をなぞるところと、そのすぐ横に4本線のみを準備しておく。この教科書に書き込む方法では、ただ文字をなぞるだけの活動になりがちである。

実践手順は、以下の通りである。

・アルファベットの音を丁寧に確認しながら、一つずつ、教師と子どもが一緒に発音しながら4本線を意識して文字をなぞっていく。

・単語のところも同様に、文字の音とその音がどの文字の事なのかをすり合わせをしながら声に出してなぞっていく。

・音と文字のすり合わせができ、音と文字が一致する単語から、4本線の方にその単語をコピーしていく。単語を書くところが、横に配置されていると、子どもは文字の高さを間違うことなく、正しく文字を書くことができる。

図4　NEW HORIZON 1年生 p.16

様々な小学校から中学校に入学してくる子どもたちの文字の認識は多様であると考えられる。そのため、中学校側は、一律にアルファベットから教えていかなければいけない、という意識になりがちである。しかし文字の扱いは、個人差も現れやすいため、子どもたちが十分に音に慣れ親しんでいることを条件に、レディネスが高まるのを待ち、焦らず時間をかけて指導する必要がある（久埜，2010）。

【おわりに】

約２年後の2020年には、小学校高学年で英語が教科として位置づけられ、時間数が確保され、教科書も登場してくる。それにともなう指導書や学習指導案も作成されていく。

小学校中学年でも、週１時間の英語の授業を体験してくる。そのような環境整備が整う中で、それぞれの教師の指導力や指導方法、ましてや、指導感は多種多様のままである。多様な指導方法の中で210時間の英語を学んできた子どもたちを受け取る中学校側は、どのようにしてそれまでの子どもたちの学びを把握していくのであろうか。子どもたちが小学校英語においてどのような力を身につけ、どこまで理解ができそうなのか、そして、英語の学習に対してどういった意識でいるのか、どのような課題をすでに抱えているのか。こういったことを理解していくためには、教科書にあるような学習の流れに沿った授業をするだけでは見えてこないのではないだろうか。小学校英語の実態を知り、小学生の子どもたちが言葉を学ぶ時の意識や思考過程、聞き取り方、文字の見え方等について日々の実践を通じて学び取る必要がある。そのためには、本稿を貫く考え方である「真実味のある意思の伝え合い」のある場面を通して見えてくる子どもたちの言葉への学び方をしっかりと見届ける必要があるのではないか、と考える。

昨今では小中の兼務教員も増え、実際に中学校英語教員が小学校の担任と協働して授業を行うことも出てきているが、中学校の授業をそのまま降ろしてきてしまう場合も見受けられる。１で引用した福本(2010)「中学校での英語の授業の導入や授業のやり方を小学校に合わせて変えている」という質問に答えた中学校教員の割合は13.5％であったということからも、中学校英語教員の意識の改革が差し迫ったところまできていると感じている。

さらに、中学校段階でやるべきことと、小学校段階で行うべきことをしっかりと分けて考えながらも(金森，2011)、小学校英語で子どもたちが身につけてきているもの、そして、その質はどこまで高まっているのか等について把握した上での中学校初期段階の指導方法について、中学校英語教員は、今後十分に検討していくことが求められていくであろう。

引 用 文 献

金森強．(2011)．『小学校外国語活動　成功させる55の秘訣』成美堂.

久埜百合・新井謙司．(2017)．「小学校英語の現場が直面する課題と授業改善の方向を探る」　中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究，第２巻，211.

久埜百合．(2010)．「子どもの学習能力に寄り添う指導方法の提案」(一財）語学教育研究所，小学校英語１，語研ブックレット３.

久埜百合．(2017)．「小学校学習指導要領を読んで一歩前へ」大修館書店『英語教育』８月号，18-19.

久埜百合・粕谷恭子・岩橋加代子．(2008)．子どもと共に歩む英語教育，ぽーぐなん

福本優美子．(2010)．「小学校から中学校へとつながる英語教育とは」『第１回　中学校英語に関する基本調査報告』［教員調査・生徒調査］Benesse Ⓡ教育研究開発センター.

渡邉時夫・髙梨庸雄・齋藤榮二・酒井英樹．(2013)．『小中連携を意識した中学校英語の改善』三省堂.

資　料

NEW HORIZON English Course 1　(2016)，東京書籍，4-17.